

【旧約聖書日課】 出エジプト記 23章10～13節

¹⁰あなたは六年の間、自分の土地に種を蒔き、産物を取り入れなさい。¹¹しかし、七年目には、それを休ませて、休閒地としなければならない。あなたの民の乏しい者が食べ、残りを野の獣に食べさせるがよい。ぶどう畑、オリーブ畑の場合も同じようにしなければならない。

¹²あなたは六日の間、あなたの仕事を行い、七日目には、仕事をやめねばならない。それは、あなたの牛やろばが休み、女奴隷の子や寄留者が元気を回復するためである。¹³わたしが命じたことをすべて、あなたたちは守らねばならない。他の神々の名を唱えてはならない。それを口にしてはならない。

【使徒書日課】 ローマの信徒への手紙 14章1～9節

¹信仰の弱い人を受け入れなさい。その考えを批判してはなりません。²何を食べてもよいと信じている人もいますが、弱い人は野菜だけを食べているのです。³食べる人は、食べない人を軽蔑してはならないし、また、食べない人は、食べる人を裁いてはなりません。神はこのような人をも受け入れられたからです。⁴他人の召し使いを裁くとは、いったいあなたは何者ですか。召し使いが立つのも倒れるのも、その主人によるのです。しかし、召し使いは立ちます。主は、その人を立たせることができになるからです。⁵ある日を他の日よりも尊ぶ人もいれば、すべての日を同じように考える人もいます。それは、各自が自分の心の確信に基づいて決めるべきことです。⁶特定の日を重んじる人は主のために重んじる。食べる人は主のために食べる。神に感謝しているからです。また、食べない人も、主のために食べない。そして、神に感謝しているのです。⁷わたしたちの中には、だれ一人自分のために生きる人はなく、だれ一人自分のために死ぬ人もいません。⁸わたしたちは、生きるとすれば主のために生き、死ぬとすれば主のために死ぬのです。従って、生きるにしても、死ぬにしても、わたしたちは主のもです。⁹キリストが死に、そして生きたのは、死んだ人にも生きている人にも主となられるためです。

【福音書日課】 ルカによる福音書 14章1～6節

¹安息日のことだった。イエスは食事のためにファリサイ派のある議員の家に
お入りになったが、人々はイエスの様子をうかがっていた。²そのとき、イエス
の前に水腫を患っている人がいた。³そこで、イエスは律法の専門家たちやファ
リサイ派の人々に言われた。「安息日に病気を治すことは律法で許されているか
ないか。」⁴彼らは黙っていた。すると、イエスは病人の手を取り、病気をい
やしてお帰しになった。⁵そして、言われた。「あなたたちの中に、自分の息子
か牛が井戸に落ちたら、安息日だからといって、すぐに引き上げてやらない者が
いるだろうか。」⁶彼らは、これに対して答えることができなかった。

元気を回復する日

一緒に歌いました讃美歌 518「主にありてぞ」は、2カ月前から選んでいたのですが、今日の聖書日課の一つ、使徒書日課（ローマ 14 章）に基づいて作られた歌詞であることが、皆さんにもすぐにお分かりだったと思います。使徒パウロが、こう記している箇所です。

「わたしたちの中には、だれ一人自分のために生きる人はなく、だれ一人自分のために死ぬ人もいません。わたしたちは、生きるとすれば主のために生き、死ぬとすれば主のために死ぬのです。従って、生きるにしても、死ぬにしても、わたしたちは主のものです。」（ロマ 14:7~8）

わたしたちは、この御言葉を、多くの皆さんと二日続けて聞くことになりました。昨日この場所で執り行いました、わたしたちの愛する兄弟（I さん）の葬送式の初めに、いつも決まった御言葉としてお読みしたのです。I さんは、先週木曜日に逝去されて土曜日に葬送式となりましたので、教会の皆さんには、もしかすると十分に連絡をすることができなかつたかもしれません。連絡があっても、葬送式に参列することができなかつた方も、きっとおありだったでしょう。あるいは、昨日の葬送式に参列くださったとしても、あまりに急なことで気持ちが着いて行かないと感じていらっしゃる方もあるかもしれません。そのようなわたしたちに、葬送式で必ず読まれる御言葉が、今日の聖書日課としてあらかじめ与えられていたというのは、ただの偶然ではないと、わたしは思うのです。讃美歌も然りです。葬儀の中でも歌われることがしばしばあるこの讃美歌を、わたしが主日礼拝のために選ばせていただくことは、滅多にないのですが、どういうわけかこの讃美歌を選んでいました。それらは皆、わたしたちの教会の交わりに必要なこととして、神が備えてくださっていたことだったのでないでしょうか。

日曜日を迎えること、そして、ゆるされれば教会に足を運び、共に礼拝にあずかること。それは、わたしたちにとって喜びとなる、力になる、わたしたちの**元気を回復**することになると、逝去された I さんは、わたしたちに思い出させてくださった方の一人でした。わたしたちの教会で交わりをいただいた期間は短く、実際には二年にも満たないときでしたけれども、その間の一年は、お休みすることも少なく、いつも礼拝堂の前のほうにお座りになる姿を、わたしたちは拝見してきました。日曜日ごとに教会で元気を回復されて帰られるお姿に接して、わたしたちのほうもまた新たな元気を回復させていただいたと感じたのは、わたしだけではないと思います。

日曜日の教会は、どなたに対してもそのような場所として備えられているのです。わたしたちの教会生活が長くなり、多くの奉仕を担われるようになると、日曜日の教会が仕事をして疲れ切って帰っていく場になってしまうことがあるかもしれません。けれども、本来は、ここでわたしたちは、元気を回復するのです。どのような礼拝であったとしても、どれほどの奉仕をするにしても、わたしたちは、ここで元気を回復する。そのためにこそ、神が日曜日の教会を備えてくださり、わたしたちをお集めくださっているからです。

各自が決めるべきこと

そうは言っても、わたしはいつも心配をするのです。「日曜日の教会に行ったは良いけれども、礼拝が長くて疲れてしまった」と、うんざりして帰って行かれる方があるのではないかと。「礼拝はともかく、午後の長い会議のおかげで、一週間酷使した体を休ませることもできなかった」と、明日からの仕事への差し障りを心配して帰られる方もあるのではないかと。日曜日の教会においでになることが、何かの義務のようになってしまうならば、元気を回復するどころではなくなってしまふでしょう。皆さんが、ご自分で判断して、ときに日曜日の教会を休まれたり、奉仕から身を引かれたりするの、ある意味では当然だと思います。そうしないと、実際問題として、身体がもたない、生活が成り立たない、ということになってしまふとすれば、本末転倒だからです。

使徒書日課（ローマ 14 章）を記した使徒パウロも、信仰に関することをどう判断すべきか、という問題を取り上げて、「それは、各自が自分の心の確信に基づいて決めるべきことです」と勧めています。何を食べるか、食べないか。どのような日を大事にすべきか。そういったことに関して、すべての人に適用される絶対的な基準や規範があるわけではない、というのです。それぞれの者が、自分で判断して決めてよい、という。

そんなことを言ったら、みんなバラバラで、教会として一緒にやって行けなくなるのではないかと心配する人もあるでしょう。一つの団体として活動するならば、確かに、皆が好き勝手にしていたのでは、成り立ちません。もちろん、使徒も、そういうことを言っているのではないでしょう。使徒は、コリントの教会に宛てた手紙の中で、「あなたがたはキリストの体であり、また、一人一人はその部分です」（I コリ 12:27）という言葉と共に、「体」のたとえを用いて、各自がそれぞれに違っていても全体として一つの「体」としての機能を保つという、教会の姿のあり方を教えています。それでも、使徒は、その各自が、おもちゃのブロックのように皆同じ形をしているべきだとは言わないのです。そのほうが組み立てる者には、やり易いかもしれませんが、そうではない、と言うのです。それぞれが自分で判断して決めるのです。けれども、その一人一人が結び合わされて、一つの体になることができる。その極意は、今日、使徒が教えている、「**生きるとすれば主のために生き、死ぬるとすれば主のために死ぬ**」という、主イエス・キリストとの結びつきにあるのではないのでしょうか。

わたしたちの多くは、確かに、主キリストと結びつく洗礼という恵みにあずかせていただいています。まだ洗礼を受けていない方にもそれを勧めるのは、単に信者数を増やしたいからではありません。キリストと結びつくということに、わたしたちの生き方の極意があると信じているからです。それは、まずはお互いにキリストと結びついていると認め合っている者同士の交わり、教会の中で知ることになる生き方ですが、教会の中に留まるものでもありません。わたしたちがこの世に出て行った先での生き方もまた、キリストと結びついた者として生きるということが、大きな意味を持っていると信じているのです。

神に感謝して

使徒パウロは、この手紙をローマの教会の宛てて書き送りました。パウロが残した手紙はほとんど、彼自身が開拓したり伝道に関わった教会に宛てて、アフターケアのために書き送ったのです。けれども、この手紙が宛てられたローマの教会には、パウロは行ったことがありませんでした。彼自身の伝道の働きの中には含まれてこなかった教会なのです。ですから、ローマの教会の事情も、それほど詳しくはなかったでしょう。それでも、日課箇所のようなことを教えたのは、もちろん、キリストに結びついた信者同士でどのように教会生活を送ったらよいか、という彼自身の考えを伝えなかったからでしょうが、実のところ、もっと大きな目的がありました。

パウロは、これから自分はローマの教会を訪問したいので、受け入れてほしいと願っていました。それは、ローマからさらに西方、エスパニアにまで伝道旅行をしたいと考えていたからです。当時のローマ帝国の最果ての地です。パウロは、そのような地に住む人々、およそ自分たちとは対極にあるかもしれないような人々のところにまで赴きたいと考えていました。けれども、それをただ自分一人の使命として、一人で担おうとは、しなかったのです。その働きを、ローマの教会の人たちにも共有してほしいと考えたのです。ローマの教会の人たちがパウロと一緒に伝道旅行に行くかどうかはともかく、彼らにも同じ使命を、共有してほしいと願った。それは、自分たちの教会の版図を拡大したいというような下世話な考えからではないのです。神がその人たちのことをも愛されて、立たせようとされている。キリストと結びついた者として、互いを尊重し合い、生かし合い、互いの違いにもかかわらず一つの体のように、どの一人も切り捨てることのない交わり、共同体、社会、「神の国」を作り出す者として、立たせようとされている。その大きなヴィジョンを、パウロは、ローマの教会の人たちに、どうしても共有してもらいたいと、願ったのです。

「召し使いが立つのも倒れるのも、その主人によるのです。しかし、召し使いは立ちます。主は、その人を立たせることがおできになるからです」。そうパウロが記すのは、何よりもそれが、主イエスのお考えであつたと信じたからでしょう。確かに、主イエスは、人を立たせることのできるお方でした。どんな人をも立たせようと、安息日にも手を差し伸べられたお方でした。いいえ、安息日にこそ、主は倒れているような人に手を伸ばされ、触れられ、起き上がらせ、立たせて、お帰しになられたのです。それは、安息日こそ神が人に元気を回復させてくださる日だと、ご存じだったからではないでしょうか。

主イエスは、しかし、そのことのために、ご自身を捨てられました。命を人に与えることによって、すべての人を立たせる道を拓かれました。そうするだけの価値があるとご存じだったからです。そのご計画が、すべての人を立たせるという壮大な計画が、神のご計画だとご存じだったからです。そうであればこそ、主イエスもまた、神に感謝して、そうなされたのです。わたしたちもまた、主に結びついた者として神に感謝して生き方を定める他に道はないのです。